

VOICE

エクアドルからの手紙

宮川 秀子

(ユニセフ・エクアドル事務所発)

(21ページもあわせてお読みください)

※地図は参考のために掲載したもので
国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

FROM ECUADOR

アマゾンの奥地にある、住民の100%が先住民族、シュワル族の村マヤイク。エクアドルの首都キトから飛行機でアンデス山脈を越え、8時間車に揺られた後、さらに歩くこと1時間以上。カヌーに乗って川を渡り、急な坂や崖を上ってようやくたどり着けるこの村で、ユニセフはシュワルの文化や言語を重視した幼児教育・ケア活動を導入するお手伝いをしています。ユニセフ・エクアドル事務所に勤務する私も、2日ばかりでこの村を訪れました。

村のおとなたちは「子どもたちに自分たちの文化や言葉を伝えて、シュワルであることに誇りを持って欲しい」と思っています。でも一方で、先住民族の文化や言葉は差別され、エクアドルの公用語であるスペイン語に比べると不利なことが多いため、子どもの将来にも影響があるのではないかと大変心配しています。最近はシュワル語をうまく使えない若者が増え、シュワルの文化が消えてしまうのではという危惧さえあります。

ある時、村人の会議に参加していると、村のリーダーが私に聞きました。「私たちは、日々押し寄せてくる西洋の文化や技術に圧倒され、自分たちの文化や知識など何の役にも立たないし、意味もないと思うことがある。日本は戦争に負けたのに、今はアメリカに劣らない経済力や技術を持っている。なぜですか?」とささのことで、どう答えようか戸惑いました。でもマヤイクの人たちにシュワルであることの誇りを失って欲しくないという一心で、精一杯答えました。「日本には、『和魂洋才』という言葉があって、これは150年ぐらい前にサムライの国日本が開国した時に生まれた言葉です。今のマヤイクの皆さんのように、日本にも西洋の知識や技術が押し寄せました。でも日本人の人は自分の文化や言葉、日本人であるという誇りを捨てることなく、日本人としての考え方や価値観をもって西洋の知識や技術を受け入れ、利用し、日本人の価値観や生き方に合わない物には更なる工夫をする努力をしました。今もそうだと思います。私は日本人で、日本人であることを誇りに思います。母国語である日本語を話しているとき、自分が一番自分らしくなれると感じます」必死のスピーチを、リーダーが一瞬懸命シュワル語に通訳してくれました。スペイン語の分からない村の人にも伝わったのでしょうか、部屋の隅で聞いていたおばあさんが泣いていました。

「今日は会議に来て本当に良かった。私たちも前に向かって頑張っていくと思います」会議の後、一人のおじさんが近づいてきてこう言ってくれました。出口では、さっき泣いていたおばあさんがパイパイをむいて待っていてくれました。言葉は通じなかったけど、気持ちが痛いほど伝わって、おいしいパイパイをいただきました。

10時間以上かけて、ようやくたどり着いたアマゾン奥地の村。日本人としてユニセフで仕事をさせてもらっていることに感謝した一日でした。

16 ■



子どもたちはお絵かきに夢中!

